

Title	〈史料と解説〉[金日成]未公刊演説『人民軍党四期四次全員会議における金日成結論演説』(一九六九年一月六日から一四日)
Author(s)	宮本, 悟 訳・解説
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No. 47
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2192
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「金日成」未公刊演説

『人民軍党四期四次全員会議における金日成結論演説』

(一九六九年一月六日から一四日)

宮本 悟 訳・解説

《解説》

本稿は、いまだに朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）から公刊されていない一九六九年一月六日から一四日にかけて開催された朝鮮人民軍党委員会第四期第四次全員会議における金日成の結論演説文を全訳したものである。この演説文は、北朝鮮から出版されている金日成の演説や論文を収録した『金日成選集』⁽¹⁾や『金日成著作集』、『金日成全集』⁽²⁾などには掲載されていない。ただし、他の金日成の演説文や他の書籍などで断片的に内容が紹介されており、この会議において金日成が演説を行ったことや一部の内容は確認できる。また演説が行われた日が一月一四日であることと、演説の表題が「我々の人民軍隊を不敗の革命武力として強化しよう」とされていることが、北朝鮮の文献から確認できる。⁽³⁾

本稿の原文は、北朝鮮から発刊されたものではなく、韓国の中央情報部が関係者に配布した文献集である「北傀軍事戦略資料集」に収録されていたものである。⁽⁴⁾この演説文は、一九六九年三月に韓国に亡命した朝鮮人民軍中尉の盧観奉が所持していた朝鮮人民軍内の学習資料に収録されていた。⁽⁵⁾当時、中央情報部はこの演説文を一般には公開していなかったが、中央情報部が縮小されて安全企画部になった後の一九八三年に、この演説文の要旨が政府系研究機関から発行された『朝鮮総覧』に収録された。⁽⁶⁾また、演説文を収録していた「北傀軍事戦略資料集」も、現在では閲覧可能になっている。

この演説文は、当時の朝鮮労働党における軍人批判や朝鮮人民軍の党組織改編を知る上で、最も貴重な資料の一つである。それだけ貴重な資料にもかかわらず、今まで日本で論文にこの演説文を利用した研究は、ごくわずかである。⁽⁷⁾この会議では、民族保衛相（国防大臣）⁽⁸⁾である金昌奉や朝鮮労働党秘書局秘書（書記局書記）である軍人の許鳳学、⁽⁹⁾朝鮮人民軍総参謀長である崔光など、⁽¹⁰⁾朝鮮人民軍の最上位の軍人達にも批判が浴びせられた。批判された軍人には、地位を追われて、その後の行跡が不明なものも多い。当時、多くの軍人が批判された理由については北朝鮮の他の文献にも記されているが、この演説文からはさらに詳細なことが明らかになる。

また、この会議では、朝鮮人民軍の党組織を大きく改編して朝鮮労働党による朝鮮人民軍の統制を強めることが示された。一九四八年二月八日に創設された当時の朝鮮人民軍に党組織は一部しか設置されていなかったが、その後数度にわたって党組織の改編が行われた。この会議で示された改編は、現在に至るまでの最も大きな改編の一つである。この演説文では、新たに政治委員や指導員を設けることや総政治局の新しい業務などが事細やかに指示されており、この会議で示された朝鮮人民軍の党組織改編の詳細が明らかになる。

翻訳において、可能な限り原文に忠実に訳すことを心がけたが、意味が正確に伝えにくかったり、日本語に直訳できなかったりした文章も多いため、意訳した部分もある。また、この演説文の文章は、演説であるためか、前後の内容が合わなかったり、主語や述語が抜けたり、誤写によると思われる意味不明な単語が多々あった。そこも推測によって訳した。また、何かの単語や文章が抜けていると考えられる部分については、訳者の推測によって大括弧で言葉を補った。さらに、読者が意味を分かりにくいと思つた部分については、訳注によって説明を補った。訳文や補語、訳注の誤りや誤解の責任は、すべて訳者にある。

人民軍党四期四次全員会議における金日成結論演説

一六九 一・六〇一・一四一（六九）三 帰順中尉 盧観奉 所持文件

我々は何日間にわたり、朝鮮労働党人民軍党委員会拡大全員会議で金昌奉、許鳳学などが犯した罪行を暴露し、党の唯一思想体系を確立し、これから思想事業を十分に行うことに対する問題を討議しました。

彼らが犯した害毒は大変大きなものでした。害毒の中でも最も危険なものは、軍隊内で党の政策と党の路線、党の思想を全てひっくり返してしまつたことです。彼が犯したものを思えば、ただの害毒と思われのではなく、党の思想、党の政策を完全に破壊したのです。

軍隊内では、五六年八月宗派の時よりもその害毒はさらに大きなものです。

八月では、彼らは陰でこそそそ話をし、党の唯一思想を中傷する遊びなどをしていたが、党の軍事路線をひっくり返すことはできなかった。しかし、金昌奉、許鳳学は党の軍事路線を全てひっくり返してしまいました。彼がひっくり返したものは、党の幹部化政策を意識的に破壊したことです。

党は停戦直後から、人民軍隊内で、戦争が起こったり南朝鮮で事件が起こったりすればもう一度米帝と戦えると覚悟を決め、この条件の下で戦争に参加した軍官達と幹部などを皆、愛し、可愛がり、有事の時に一階級高い職責を担当遂行できる幹部になれるようにすることを求めました。

しかし、この者達は、党でこれほど可愛がった幹部達を、数千名ずつ使えないといって追い出しました。また、幹部達を教育しませんでした。停戦後、今日まで、我々が教育事業を十分に行っていれば、有能な政治活動家と軍事幹部に全員なっていたでしょう。

昨日、討論を聞いてみると、集団軍で大学卒業生の何名かが使い物にならないと言います。このように勉強をさせず、教育も与えませんでした。

これが幹部化政策を反対するのではなくて、何だというのでしょうか？

金昌奉は勉強する人たちに対して、勉強して何になるのかと毒づきました。彼はあまり勉強しなくても、保衛相をやってみせると法螺を吹きました。これは無知な中国の張作霖や呉佩孚のような軍隊を作ろうとしたことと、何の違いがあるのでしょうか？

私は軍隊の幹部達の履歴書を見ました。軍事大学を出た人もいましたが、多くの同務達⁽¹⁴⁾が勉強できず、落ちこぼれたままでした。

戦争経験を集め、戦争経験の中で我々がこれからやっていく我が国の新しい戦略戦術について、党は軍隊の現代化を

実施することで、戦闘力の強い部隊を作ろうとしました。しかし、戦争経験は全く酌み取られず、研究もされませんでした。我々が持つている戦争経験は米帝と三年間戦つた高貴な経験であるため、金でも代えることはできません。

我々の戦争経験は将来に強力な敵と戦つて勝てる元手の一つです。このような良き経験を軍隊で全く研究しなかつたのです。停戦直後、私が、我が国で最も重要なものは、山岳が多く、湿地原などがある条件の下で、これをうまく突破し、これらを我々がうまく利用すれば、優勢な敵にもうまく打ち勝つことができると言いました。米国の奴らは、現代式武器が封建的武器に負けたと言いました。我々が自然障害物をうまく利用すれば、現代式武器にも打ち勝つことができるでしょう。これについて私は何回も話しました。

しかし、この者達は全く行いませんでした。山岳が多いところには曲射砲が多く配備されるべきであるのに、人民軍隊には曲射砲より直射砲が多い。

六〇ミリ迫撃砲及び「カエツ」⁽¹⁵⁾も私が作れと言った。しかし、一つも実行されなかつた。私がすでに崔光同務が空軍司令官の時に言った。今、敵達はレーダーが発展した条件の下でレーダー戦をしている。しかし、我々はレーダーが少くない。また敵達は超音速戦闘機を持つているが、我が国は山が多く、超音速だけを持つていても駄目だ。超音速よりも低空飛行する飛行機がもっと優れていることもある。同務諸君、超音速飛行機を恐れるな。私は超音速を導入することに反対ではないが、超音速というのはウォーンという間に過ぎ去つてしまう。超音速はソ連や中国のような広大な地帯が必要である。我が国の自然地理的条件で適切なことを指示したが、実行されなかつた。

この者達は、不意打ちだの、第一撃だの言いながら、こんなことばかり強調し、我が国の山岳条件に見合つた軍事路線を執行しなかつた。

我々は、前の祖国解放戦争の経験から明らかかなように、全武装化をできなかつたために後退した。実は、補給がなくて後退した。人民達をよく教育し、十分に武装させ、至る所で敵を襲撃し、殲滅したならば、たとえ人民軍隊の前線が

遮断されても後退しなかつたであろう。そこで、我々は全面武装化処置を提起した。しかし、金昌奉は労働赤衛隊(17)の創設を嫌がった。軍事委員会でも強い衝撃を受けたが、この者は人民を信じず、党も信じず、ただ追従者のみを信じた。また、この者達は全民武装化だけに反対したのではなく、戦争経験に基づき、山岳戦と敵中で戦う軽歩兵部隊を組織するとう党の要求を、満足に実行しなかつた。実行したかと思えば、プエブロ号事件以降、多くもない軽歩兵部隊を全部解散させてしまった。私は、昌奉に、軍隊内に軽歩兵部隊を組織し、敵の後方に回って戦うようになれば、原子爆弾よりも良いと言った。私は、今回の会議で、此奴の罪悪が大きいことに付け加えて、あなた方はなぜ黙って見ていたのか？ 党も悪かつたのだ。これを未然に防げたならば、こうはならなかつた。つまり、山岳戦をうまく行うこと、軽歩兵を組織して展開する問題、武装を軽量化する問題、人民軍隊を幹部化する問題、これらを除いてしまうと、我が党の軍事路線に何が残るのか？

これが我らの大いなる名誉である。将来、戦争になり、大いなる名誉となるものを分らないとはどういうことか？ 祖国解放戦争の経験に基づき、曲射砲の力を増加させ、山岳戦を展開し、全人民を武装化し、至る所で敵を襲撃すれば、必ず勝利を収められるであろう。

しかし、この者はそれを行わず、多くの幹部達の首を切り、初々しい軍人達を教育隊へ送り、教育隊で現場労働をさせるために送つたのである。もう一つの欠陥は、全国要塞化方策に反対したことである。この者達は戦車を全部破壊し、坑道がグニャグニャしているといつて全て削り、こんな真似をしながら、坑道を宮廷のように作って何をしようというのか？ これは「昌奉」だけではなく、「崔光」、「鉄万」⁽¹⁸⁾もそうで、「民族」保衛省指揮部が入る坑道は八年かけて掘つたが、その廊下には大理石や玉石を敷いた。これが何に必要なのか？

人民達の地下鉄を宮廷のように仕立て、大理石と玉石を敷くというなら良いだろう。こんなことをするのが要塞化といえようか？ グニャグニャした坑道を直そうとして、他のことを何もしなかつた。

これは罪ではないのか？　ところで、あなた方はどうして、見て見ぬふりをしているのか。党の軍事路線をこのように全部台無しにしてしまった。

何のために戦車をはじめとする装備を撤去したのか？　何のために前線の地雷などを全部解体したのか？　何のために、元々ある坑道を全部壊したのか？　正直に言つて、此奴らは悪人である。長津、白頭山飛行場¹⁹に坑道を掘れと言つたのにしなかつた。この者達がやったことは、党の要求に耐えられずに、実行したと報告だけして、遅れても実行したと報告した。我が党の政策は、党の幹部化政策、祖国解放戦争経験の実状に沿つた現代化政策、我々の力に沿つた山岳戦を遂行できるように、「六〇」ミリ迫撃砲とその他の小火器を持つて戦うのが良いと思つてゐる。

戦争勝利の決定的な要因は、現代戦と遊撃戦の組み合わせである。今、敵達が最も恐れるのは遊撃戦だ。さらに重要なことは「金昌奉達が」党の軍事路線にのみ反対したのではなく、一切の戦争準備に反対したことである。こんなことして、戦鬪力を強化できるのか？　軍隊と人民の関係は大変悪くなった。党組織が力を出せずにいる。組織はあることはあつたが、不正と戦えない党組織は役に立たない。人民軍党執行委員会は屍のようだ。軍隊内で官僚主義を振るゐ、人民との関係が悪く、国家財産は放蕩し、勝手気ままに振る舞つた。しかし、こんな事と戦えないとは、党組織は麻痺状態である。これが、いかに危険なのか？

敵を目の前にして何もしなければ、部隊は団結できず、軍事幹部と政治幹部が団結できず、党組織は麻痺状態になり、兵士達を無茶苦茶に酷使して面倒は見ず、甚だしくは兵士達が水を汲んで飲むように与えたバケツでさえ他の用途に使つてしまう。だから団結できなかつた。国家財産を数億ウォン²⁰ずつ放蕩したことは言うまでもなく、人民達を殴り、そして言うことを聞かないことはもちろん、人民達が支持もしないで、あんな軍隊、潰れるなら潰れると言つてゐるといふ。これほど深刻なことがどこにあるのか？　また、訓練もせず、兵器も増産しないとほげない。金昌奉や許鳳学だけでなく、人民軍隊内の保衛省幹部達は、事を前にして罪を犯し、人民軍隊の発展に大きな被害を与えた。

以上で提起された原因は、人民軍隊内党組織が麻痺したことにある。党組織が麻痺すれば、戦闘力がない。人民軍隊に戦闘力があるのは党組織があるためである。同務達、命令だけ信じ、指揮官がいれば良いと思っているのか？ 絶対に駄目だ。党組織があればこそ戦闘力があるのだ。

重要な原因は、党組織が、金昌奉と許鳳学をはじめとするその他の幹部達が軍閥主義を許して党が麻痺しても、党政を研究してないので分からなかった。党政を研究したならば、昌奉が一六高射砲師団に行つて初な幹部達の首を切つたことが党の政策に違反しているのか否か、またはその集団「軍」を指導した際に初な幹部達の首を切つたことが党の政策に違反するのか「否か」、「なぜに分からなかったのか？」これは違反だ。どうして、ただ黙つて見ていたのか？ 党政の研究や党組織の麻痺との闘争は枯れ、報告もせず、しっかりと見もしない。同務達が闘争できないなら、なぜ党中央委員会に報告もしないのか。これは党の幹部化政策に違反する行動だ。

党が麻痺して、闘争もしないで、無力になつていた。昌奉と許鳳学が党の軍事路線に反対して、戦争準備を破綻させているのに、皆がこれと闘争できなかった。同務達の中でも一部の師団長や連隊長は、まだ党組織を尻に敷いている。

まだ、「一部の師団長や連隊長は」自分の権限が残つていると言つていいる。軍隊内の指揮官の中で、昌奉や許鳳学をはじめとする一部幹部達には修正主義思想が入つてきた。修正主義思想が入つていないなら、なぜ米国の奴らの飛行機を撃つなどと言ひ、また米国の奴らが海の近くに侵入しても撃たず、侵入すれば捕らえろと言ひのは、フルシチョフの指示と何が違うのか？ 何のために、戦争準備をするのに無駄話が必要なのか？ 何のために、坑道に大理石、玉石が必要なのか？

修正主義が入つてきた。南朝鮮では政権が一度変われば月給を上げてくれるが、こんなことをすることは良くない。では、我々が革命を遂行するのに、お金をもらつて革命を遂行してきたのか？ ならば、その前に、革命伝統を継承すると言ひながら修正主義を続けるのか？ 祖国を統一する願いと米帝と戦う決意があるならば、こんな事ができるの

か？ 何のために党から数百万ポンドをあげたのに、無駄なシャツ製造工場、修理工場、ベニヤ板工場、ビニール工場が何に必要なのか？ 人民軍隊内でベニヤ板工場が何になるのか？ たかが師団長の家でも順番に作ろうというのか？ これは全て修正主義者だ。修正主義はフルシチョフだけがするののか？ そうではない。何のために党のスローガン、革命のスローガンに反対したのか？ これが修正主義だ。他に理由はない。軍隊内の昌奉をはじめとする一部幹部達の中には、修正主義が入っている。これは全て資料が証明してくれる。

米国の奴らのスパイ船「プエブロ号」が侵入してきた時、これを逮捕したことは我が党の処置が正しかった。再び敵と戦おうということだ。しかし、私の考えでは、この人々の行動を見ても修正主義が入ってきたといえる。

軍閥主義が入ってきた。人民軍党の組織が無力になり、党中央委員会から離脱するようになり、党と政府が干渉できなくなり、特別扱いされる存在となつて、自分と親しい幾人かだけで家族主義を行った。これは間違いない。軍閥主義を助長させ、特別扱いさせ、党組織の力をなくし、党政治事業に干渉できないようにし、家族主義を作り上げ、自分の秘密が外に出ないようにした。

最後には、この人達は、驕り高ぶるだけ驕り高ぶり、昌奉などの人々は党の政策に反対し、難癖をつけてきた。これは危険である。このように党と政府はもろろん、人民達も知らないうちに軍閥主義を我が国に実現しようとした。しかし、まだ「軍閥主義は」成熟はしていない。我々は「軍閥主義が」成熟する前にいる。このように昌奉の罪悪と、この会議で提起されたことに基づき、私はこのように結論づける。党を無気力にし、修正主義を引き入れ、軍閥主義を試み、家族主義を「行い」、後には党に反対し、結局は反革命準備をしたと結論づける以外にない。同務達、驚く。あの人々はパルチザンを経験した人も反革命をするのか「と思うであろう」。パルチザンを経験した人は革命に反対しないのか？ 昔、我がパルチザンの参謀長をしてきた李周山も数十年間にわたり一緒に闘争してきたが、「革命に反対して」逃げた。

ある人は「祖国」解放を一日前にして逃げた人もいた。今日は逃げないが、いつでも逃亡して変節する。今日は金昌奉が出てきたが、明日また昌奉が出てくるかも知れないし、明後日も昌奉が出てくることもある。これを恐れるな。これを恐れるのはマルクス・レーニン主義の世界観を持ってない人だ。我々は、パルチザン活動期、「つまり」コミンテルン七次大会決定に基づいた小部隊活動の時期、機関銃班長がソ連と日本が手を結ぶのを見て、すぐに「事が」解決されるところと思えず、逃げた。

このように思想が歪んでおり、見通しが立たないために、そうしたのである。この者達は、なぜこのような真似をしたのか？ 我々が革命を行えと言うと、この者達は革命に嫌気がさして、不自由なく過ごし、半分の地だけでこうして生きようというのだ。ならば、何のために党の軍事政策を執行しなかったのか？ この者達は投降主義に変節し、革命を裏切り、社会主義革命から離脱しようとしたのである。過去に何か革命をしたという人にも、最後までやる人もいれば、変節する人もいる。

私がパルチザン隊員として直接教育した人も逃げた。革命隊列では、卑怯な者は去りなければ去れ、赤旗は「我々が」最後まで守る。これがスローガンだ。私がパルチザンをしていた時、東満州に初めて行った際に吉林から数多くの青年学生を連れていったが、途中でもう歩けないと言う人もいた。望み通りに帰してあげた。革命活動時期とパルチザンの時にも、こんな事を数多く経験した。昌奉みたいな者は、最初の頃はよくやったが、今日に至って変節した。私は外務相に聞いてみた。昌奉のパルチザン時代はどんな風であつたかと聞いてみれば、ちよつと臆病者だつたということだ。

問題は、過去によく戦おうが、戦えなからうが、今日に至って変節し得る「ことである」。一緒に道を歩んだ人たちが、目的地にたどり着くことができなまま、脱落する人もいるだろう。党は、思想闘争で小事とも妥協せず、闘争することを要求する。マルクス、エンゲルスも「そのように」教えた。

昌奉がこうなったのは、またこんな人になったのは、党政策で武装せず、驕り高ぶって革命をしたという看板の下で勉強もせず、党政策と革命伝統も研究せず、夫人が日本軍で看護婦をしたため、浮かれた雑誌や小説だけ読んで、堕落した。マルクス・レーニン主義を研究しなかったので修正主義思想が入り、安逸に家族主義を行い、軍閥主義を行い、追従者を導き入れ、党組織を無力に仕立て上げた。

党中央委員会にも昌奉は二、三回しか参加しなかった。病氣と称して。私の考えでは昌奉「の堕落」がここから始まったのだ。だから、過去に革命をしたから堕落しないと考えるな。同胞達、洛東江⁽²¹⁾まで行つて来たから堕落しないと考えるな。党政策を研究しなければ、誰とて皆、堕落する。昌奉や許鳳学が堕落した弁証法的証拠として、「彼らは」働かず、党政策を研究せず、党から批判できないようにした「ことが挙げられる」。

結果はこうなった。これを偶然と考えるな。全ての条件が、兪昌権や金陽春、金正泰⁽²²⁾にも「揃っていたので」、そうして墮落した。金正泰は、以前には夜二時まで勤務して仕事したと泣きながら批判した。しかし、その反面、酒をよく飲むから奴らに利用された。党ではマルクス・レーニン主義世界観で武装しようとしている。これは偶然ではない。前進する過程で墮落分子が出てきたのだ。昌奉が古臭くなったのだ。これは新陳代謝で予想される過程だ。古きものを除き、新しいものは発展するのだ。

党は、この古きものを捨てた。思想闘争では少しも同情しない。こんなものは洗い、取り替えてこそ、清められる。こんなものを捨ててこそ、新陳代謝ができる。人民軍隊で金昌奉が残した害毒を清め、党の唯一思想体系を確立し、軍隊内で思想事業を強化するためにどうすれば良いのか？ 党政策の思想教育事業を強化せねばならない。力を出せず、抑えつけられている党を元氣旺盛な党にしなければならぬ。

まず、党組織を強化しなければならない。誰でも党組織を拒否する者は、我が党内から除かねばならない。党規約の通りしなければならない。しかし、人民軍隊内の党組織は有名無実である。人民軍隊内党組織は、どんな師団長や連隊

長によっても決して左右されるものではない。こんなものに左右されるとは、もう終わりだ。党組織を復活させ、党の民主主義を発揚させて、誰々を問わず、党組織生活において規約に服従しなければならぬ。

ある司令官や「民族」保衛相に服従するのではなく、党に服従しなければならない。ある個人に左右されるのではなく、一人一人の党員達は、どこかの党組織生活に忠実に参加する義務のみがある。このように「ある個人に服従」すれば党規約によって制裁を受けねばならない。規約には、罰の重軽や大小に関係なく、党の政策と規約にだけ服従するようになってゐる。

人民軍隊だといっても特別ではない。正反対に、軍隊内党組織は他の党組織に比べて、さらに強くなければならぬ。まず、党組織生活を回復しなければならぬ。「民族」保衛省党委員会、集団軍、師団、連隊の党委員会を強化し、全体党組織を強化しなければならない。厳格な党組織生活を強化し、重要なのは、どの党員も関係なく批判し、自己批判、相互批判を強化しなければならない「ことである」。

党員教育は大変重要な手段である。上級軍事指揮官を批判できないといういい加減な意見をなくせ。指揮官も党員である。どんな人も関係なく、すべて批判すべきである。批判のための批判ではなく、教育と団結を目的とした批判である。他人を中傷するための批判は正しくない。そうあつてはならない。ある人は党組織が誰に属するのかが、正しくない。党組織は、ただ党規約と上級党に属する。連隊長の党や政治部連隊長の組織ではない。連隊党委員会は連隊内党員を代表する党である。

責任秘書は会議を開催する責任と会議で採択した決定をどのように執行するのかを監督し、執行可能なように助け、督促する義務を持つてゐる。秘書といつても、いい気になっていては駄目だ。神聖な党組織を誰の物かというのには正しくない。官僚主義から離れねばならない。党委員会内では一切の不健全な思想要素、軍閥主義、修正主義、事大主義、封建主義、資本主義などの一切の思想と闘争せねばならない。朝鮮労働党は、ただマルクス・レーニン主義の原

則と我が党の思想以外には知らないと武装すれば、以上で提起された欠陥と戦える。

党組織の幹部とは、封建時代の子爵の行動ではなく、党も一切の無原則と闘争し、戦闘的な組織として、先鋒的な組織として活動せねばならない。レーニンは党の全ての組織が最高形態の組織だといった。我が党の全ての組織が最高形態である。軍隊内でも、やはり党が軍隊を指導しなければならない。

党が軍隊を指導するからといって、政治部連隊長や政治部長や政治委員会の指導を意味するのではない。党組織の指導を意味する。党委員は軍隊内で良き幹部として切り盛りせねばならない。軍隊内党組織は徹底して党中央に忠実であり、党の路線と政策を受け入れねばならない。「軍隊内党組織が」今まで党政策を適時に受け入れないため、「金昌奉の罪行を」知らなかった。「金昌奉達は」党中央委員会第四期「第一」五次「会議の」決定を六ヶ月間で踏みこじった。

党決定を受け入れない者は、我が党に属さない者である。それほど嫌なら「黨員を」やめる。我が党には綱領と規約を承認し、党組織に服従する人のみ入ることができる。党の決定を擁護し、守り、党中央を命がけで守れる人でなくてはならない。

軍隊は党の政策を執行する革命武力である。この路線を執行しない者は必要ない。今まで金陽春が、君の軍隊か？ 私の軍隊か？ こんな話をしたというのだが、なぜ批判を加えなかったのか？ 批判を加えれば、陽春は驕らなかったのではないか？ 党組織の無力ぶりを早く直さねばならない。すぐに直そう。党の役割を高めると同時に政治機関の役割を高め「なければならぬ」。政治機関は党政策、党決定を執行する党の部署である。これは参謀部と上下関係がない。政治部は、幹部達と仕事して、黨員達を教育し、党政策を実行し、戦争準備軍事訓練を政治思想的に保障する部署である。しかし、昌奉は、政治活動家達は口だけ達者だと言っていた。

これは政治事業をするなどということである。これは反動的で党を冒瀆する行動だ。これに対して、人民軍党委員会が昌奉に強い批判を加えられなかったのは執行委員会委員達「のせい」だ。責任を取れ。政治部が自分の「命令」系統で

報告もできぬようにし、参謀部を通じて報告させるといふ犯罪的行動を敢行した。崔光をはじめとする軍従事者達が全部責任をとらねばならない。

政治機関の機能を高めることは、軍従事者達の軍事的訓練を党が保障するためにも良い。軍従事者達は、政治機関の威信を高め、政治機関がなければ師団長や連隊長が絶対に相談できないことを分からねばならない。軍隊内で命令万能主義、軍事万能主義が正しいはずがない。軍事行動が政治的な支えなくしては何もならない。政治的な目的がない軍事行動があるはずない。軍隊内各級単位では、政治機関が全て自分の事業を保障できる力ある機関と理解し、仕事をすべきである。

我々には独断的な人はいない。いくら集団軍司令官が一人で思いついても、何にもならない。政治機関と党組織が役割を果たしてこそ、司令官や師団長が働ける。政治機関を見下して、蔑視するような問題を解決しなければならぬ。また、政治活動家達が軍従事者達を尻に敷いて、思いのままにし、何かするのも駄目である。軍隊内党組織はどこまでも軍事活動を保障することにある。しかし、「軍従事者が」党の意図に違反すれば、反対闘争をしなければならぬ。党の命令と意図に合えば支持し、違えば反対闘争をしなければならぬ。軍従事者達の思想水準と戦争準備に関連して、党組織と政治活動家の水準を高めなければならない。

師団、連隊には政治委員制を設置する。これは党を代表する。政治委員の義務は、軍従事者の仕事が十分にできるように、励まし、助けて、政治的に問題があれば制裁し、また忠告しなくてはならない。今後、全て命令書には軍事幹部が一人で署名できず、政治委員が署名をして、はじめて効力が発生する。これは我が国の水準に沿って、必ずやるべきことである。

政治部長はそのままにして、政治委員を全部設置せねばならない。連隊には、組織上級責任指導員、宣伝上級責任指導員を設置し、その下に指導員を配置する。師団には師団政治委員がいて、政治部長もいる。この人々は党政政事業だ

けではなく、労働階級出身であり、党に無限に忠実な幹部として、党の隊列を組まねばならない。総政治局は人民軍隊内党政治事業に対する指導書を作成し、党中央委員会秘書局に提出せよ。

大隊と中隊には政治指導員を設ける。将来、政治事業をさらに強化するため、人民軍隊内総政治局を強化しなければならぬ。今まで政治局があまり仕事をしなかった。

許鳳学が残した害毒の影響を下の者達にかなり与えてしまった。許鳳学は党の唯一思想を中傷し、封建、儒教思想を植え付け、軍隊や政治事業において中央党の指示に反対し、軍隊を特殊な組織に作り上げ、特殊化するための事業をあちこちで行ってきた。人民軍隊内の映画撮影所と協奏団には、全く使い物にならないクズを送った。党中央にほとんど服従せず、登用も軍隊内幹部達の党的主張と党的原則によって登用したのではなく、家族主義的に行った。

軍隊や党事業は党中央委員会組織指導部の一つの部署として党中央の直接指導を受けねばならない。軍隊内党政治事業をさらに強化するために、軍隊内幹部達「に対する管理事業」を秘書局に渡して、軍事幹部は軍事部で管理し、政治幹部達は党中央委員会組織指導部で管理する制度を作らねばならない。これを管理するために党中央委員会組織指導部に軍隊内政治活動家達を見るための副部長を置き、その下に課を置こう。軍隊内党事業規定を新しく作り、軍隊内社労青組織を強化する⁽²³⁾対策を早速立てねばならない。軍隊内社労青員が多くの条件の下、これを弱めてはならない。

人民軍隊内社労青委員会を組織し、党中央委員会組織指導部勤労団体の指導を受け、総「政治」局の指導を受け、社労青の指導を受けねばならない。軍隊内社労青といっても、銃を担いでいるだけで、変わったことは何もない。軍隊内軍閥官僚主義を清算することが大変重要である。大体どこから「軍閥官僚主義が」出てきたのか理解できない。パルチザンの伝統を継承すべき軍隊が、パルチザン時代にはそうじゃなかったのに、どうしてだ？

我ら革命軍隊には官僚主義があるはずがなく、官僚主義があつては部隊を率いることも、戦うこともできない。解放後にも提起され、特に、停戦直後に徐々に安逸で豊かになった党の役割が弱くなると「官僚主義が」出始めた。軍閥官

僚主義というのは封建統治の輩が使う手法である。革命家達が軍隊を指導する方法は説得と教育によって動員することだ。どこでこんなものが出てきたのか？ とすれば首を切れというやり方がどこから出てきたのか？ 何のために革命軍隊内で喧嘩するのか？ こんな事は徹底的に切り捨ててしまわなければならない。すぐに切り捨てるためには軍事幹部達や政治幹部達、我々が革命をする人であることを、はっきり分からせねばならない。革命する人々の事業方法は、同志的に応対し、目を覚まさせて、教育しなければならない「ことである」。

ともすれば処罰し、首を切り、教育隊に「送り」、免職・除隊させ、人々が頭を上げられないようにする。もし、こんなことをすれば国防軍や帝国主義軍隊と何が違うというのか？ 全ての労働階級の幹部がこんな真似をするのか？ これを改める運動を展開するに際して、決して行政式の方法ではやるな。これもまた官僚主義の方法だ。どこまでも教育と説得によつて、解決すべきである。組織規律を適用するのではなく、党で非難をしなければならぬ。

偏見や官僚主義を正せば、威信が落ちると絶対に考えるな。これは正しくない。師団長や連隊長、司令官を悪いと言っているのではない。彼の官僚主義を悪いというのが、どうして偏見なのか？ 崔敏喆と朱道日²⁴に全面的に反対することは偏見や官僚主義を暴露することであり、偏見ではない。それ故に今、汚れが付いたものにピカッと光を照らし、全部洗い出さねばならぬだろう。反対に、明かりを灯さず、引つかき回しただけでは、全部洗い流すことはできない。

こうすれば、例えば、崔敏喆の司令官時代を洗い出すのが悪いのか？ 同務達が偏見をもつて、政治活動家達が背後からつけて来るという話をやめろ。政治活動家が背後からつけて来るのは、あなた方の官僚主義を掘り起こすことに他ならない。

官僚主義は、背後からついて回らねば「解決に」ならない。我々は思想闘争の炎の中に「身を」置いて、「官僚主義を」剥ぎ取らねばならない。故に、皆が自ら進んで、集團軍司令官や参謀長、副司令官、政治委員も、官僚主義が付

たものは思想闘争の炎の中に「身を」置いて、すぐに剥ぎ取られねばならない。反対に、行政的方法で、水も注がず、刀でバサバサ切れば、「官僚主義が」再び生き返ることもある。規定通りの生活をしていれば、指揮官が兵士を殴れということがあり得るのか？ 指揮官が兵士の肩章をむしり取るという規定があるのか？ 人民軍隊規定にそんなものがあるか？ ありません。正しかったのか？ 間違っていたのか？ どこにそんな教育方法があるのか？ 同務達自身が規律を乱暴に違反している。この師団長同務だけではなく、今回の会議で師団長達に対して多くの提起が上げられた。資料は私が持っている。

様子を見ようというが、垢を落とせるか否か見てみよう。軍隊は規定通りに生活しなければならない。昌奉が遊び回りながら、「幹部の」首を切ったのは、規定を乱暴に違反したものである。なぜ、これを黙って見ていたのか？「民族」保衛相や許鳳学は、あまりに酷すぎて行政的な方法では処罰できない。同務達は手本を見せ、絶対に行政的な方法で全てを処罰するな。すべて教育的な方法で処理しなければならない。

今、同務達と長い時間を真剣に討議し、すべて直そうというのである。行政的方法で無理強いしてはならない。最も良いことは、軍事規定通りに生活をしなければならない。「ことである」。だから、足を伸ばして「靴下を」脱がさなければならぬ。官僚主義をやりませんと靴下を強く巻き付けて脱ごうとしなければ、脱がすこともできない。このような人々にはよく解説してあげて、自ら靴下を脱がせ、「足を」伸ばして脱がさねばならない。また、脱ぐと言っても、中途半端に脱がせて、全て脱がなければ意味がない。無理強いは、決してするな。このように闘争してこそ効果がある。

思想事業もしないで、熱湯に無理矢理入れても意味がない。このように上手にしていかなければならない。また、軍隊内の重要な欠陥の一つは、軍事規定をうまく履行しなければならぬ。「のにできないことである」。軍隊は必ず規定通りに生活しなければならない。なぜなのか？ 軍隊とは一人や二人が生活するのではない。党の場合には、党の組

組織を動かそうと思えば、標準規約があるべきであり、内務規定もあつて、規定に欠点があれば直せるが、軍隊が規定生活を乱暴に違反することは許されない。

そのため、党規約をまず読んで、軍隊内党事業規約と軍事規定をすべて読んで、学習しなければならない。規定が重要である。内務規定、軍事規定など全ての服務規定に沿つて生活をしなければならぬ。重要な欠陥は、規定を作成しておきながら守らないことで、「これは」意味がない。軍隊は規定通りに生活し、行動し、生活しなければならない。規定にあれば、それに違反するな。党の決定書と党の規約に定められた通りに行動せねばならぬ。それこそ党員の資格があるのであり、軍事規定を守つてこそ軍官の資格がある。

今、軍隊内で軍事規定を守らない風潮と強く思想闘争をすべきである。軍隊内での共産主義道徳教育を高めねばならない。どんな共産主義道徳教育で、人を殴ることが定められているのか？ 現在では、むやみに自分の嫁や息子も殴れない。軍隊内で共産主義道徳教育を高めねばならない。まず同志達に対する態度の問題である。

金昌奉があんな罪を犯したが、我々は会議にも参加させ、批判書を書けと言つてあげた。強圧的な方法は使わなかつた。思想闘争は思想闘争であり、法に違反すれば、法に沿つて処理しなければならない。何のために兵士を自分の家の豚小屋に全てぶち込んで、殴つて小間使いとしてこき使うのか？ 人民の間はお互いにさらに愛し、忠告し合つて、お互いに助け合はねばならぬ。

同務達がする方法といえ、強圧的な方法を適用している。共産主義道徳教育を強化せよ。住民の財産を守り、侵さないようにしなければならぬ。同務の夫人達が家で悪いことをしているのに、なぜ庇うのか？ これで共産主義道徳があるというのか？ 「同じ」社会の人々なのに、軍服を着た人と着ていない人との間は、なぜ同志ではないのか？ ところで、なぜ地方の人々を蔑視するのか？ これは軍隊内で共産主義道徳教育をしないから出てきたものだ。我々は朝鮮人の性格を現して、肯定を持つて不正を反省させる教育の代わりに、軍隊内に営倉制度を復活させた。

政治事業を人間との事業に転換し、この事業をうまくやつて営倉をなくさなければならぬ。営倉を置くことは、共産主義教育、道徳教育、肯定教育をしないということである。「梨峴里²⁵」と平壤製糸工場では、肯定的人物を不正の人物にしてしまった。人民軍隊には肯定的模範が多かったのに、全て捨てて強圧的な方法を使っている。軍隊内でも一時これをしていたのに、なぜしないのか？ 今、軍隊内では、お互いに助け、愛する気風がない。また群衆道徳をよく守り、群衆の財産を侵さず、人権を尊重する代わりに、軍閥万能主義を招いている。

同務達、なぜ両親が死亡したのに、「軍人」家にも帰してやらないのか？ なぜ三〜四年間も服務した軍人をなぜ帰してあげないのか？ 昌奉や許鳳学は共産主義道徳もない奴らである。それがあんなら、人の頭などやたら殴つて党の指示を執行しなかった「りしない」。

軍事規定と共産主義道徳教育、肯定教育、不正を直してやり、良きことを常識化すべきである。正直言つて六師団一五連隊長は欠陥を直せると思う。彼は洛東江まで行つてきた。彼の欠陥は、共産主義道徳教育をしないことにある。教育しなければ、立派な人材になれない。人民軍隊が地方の党組織を守り、人民を尊敬する運動を展開した。ために、社会主義戦利品を守る運動を展開しなければならない。

我々は、我々が組織した党である。軍隊党であろうと地方党であろうと、労働党規約によつて組織された。党組織を守らねばならない。人民政権も我々が守らなくてはならない政権である。我々が組織した人民政権だからである。人民もまたそうである。何のために？ 人民のために、社会主義の戦利品の制度と党を守るために、銃を与えたのである。

そのため、我々の任務は党、政権機関と人民を守ること以外に他はない。そのため社会主義の戦利品を守る運動を展開しなければならない。だから人民を尊重し、国家の法規を軍人がまず守らなければならない。武力で防衛する軍隊が一層「国家の法規を」よく守らなければならない。何のために同務達が洛東江まで行つて来たのか？ 我が政権の戦利品と社会主義制度を守るためではなかったのか？ 国家法令と法秩序を軍人が率先して守らなければならない。

この問題もまた教育材料にせねばならない。

国家の共同財産を愛護し、ほんの少しも社会財産を侵すべきではない。今、温泉のようなところに病室を建てるという口実で、建てられている人民のレンガ家を崩して、「軍人の」家を建てて住むことも人民軍隊「がすること」であろうか？ 豚小屋で子供達を働かせることは許されない。我々は、駐屯地の人民が、良き生活ができるように助けてあげべきなのだ。

兵士達に我々が自ら助ける模範を見せねばならない。そうすれば、除隊しても国家財産を愛護し、また忠実さを發揮できる。彼らの経済事業、宣伝事業、改造事業を全て助けてあげなければならない。我々はパルチザンをする時、パルチザンは人民に水を運んであげ、庭を掃いてあげ、薪も樵って、敵から奪った布や服を「人民に」着なさいと差し上げた。革命伝統を継承する軍隊が、人民を助け、政治的に影響を与える方法も知らないのか？ 人民のように生活し、生きていけば、スパイすら侵入することができない。

集団軍を訪ねた時も語った。人民との血縁的連帯を強化する闘争を展開しなければならない。人民軍隊内の党の路線の中で重要な全社会の革命化と労働階級化のために、人民軍隊が先鋒にならない。軍隊は強い組織体である。軍隊は個人主義に反対する集団主義傾向の学校である。個人主義に反対し、集団主義傾向の思想で武装することが重要である。そのため、人民軍隊は一つの集団である。

地方党幹部に人民軍隊が三年以上服務したといつても、集団主義思想によって武装したということはできない。個人主義「的な」個人、利己主義が多い。集団の利益のために服務することには自分の利益も含まれる。軍隊は全体の利益のために服務する集団である。

軍閥官僚主義、個人、利己主義に出れば、集団主義思想で準備することができない。集団主義思想で軍隊が先鋒になれ。こうすれば社会主義労働階級化することも簡単である。軍隊内の技術兵は四〜五年もすれば、社会に出て思想革

命、技術革命に大きく寄与することができる。良き贈り物を作れる学校も作り、先鋒隊の役割をせねばならない。これが社会主義制度と社会主義の建設において最も難しい問題である。昌奉は、悪いイタズラばかり行い、革命化を疎かにし、党をすべて麻痺させた。あなた方も密造酒売買の汚名を全て注いでこい。これが社会主義制度では、どれほどの害毒を与えるのか？ 人民軍隊が、党が出した革命化、労働階級化で最前列に立たねばならない。

戦争準備と関連して、党の軍事路線を徹底的に貫徹せよ。幹部達を教育せねばならない。軍隊内の幹部事業をうまくやらねばならない。幹部化軍隊を作ろう、幹部の象徴を全員が付けられるようにしよう。肩章などを付けて歩けば良いのではない。党に無限に忠実であつて、労働階級化、革命化を遂行せねばならない。まだ、党の前に正直になれないでいる。昌奉や許鳳学は党に忠実ではなかつた。党の路線に忠実な幹部として一人一人成員を育てねばならないだろう。

成分はどうであれ、もう一〇余年間軍隊に服務したので成分も全て改造されている。すでに、過去の個人農業時代、私的生産関係が終わつて、長い歳月が過ぎた。小ブルジョワ思想は長い生活を通じて克服しなければならない。そのため我々は、成分も改造されている。今は、二〇年間集団生活すれば、相当に労働階級化したといえよう。しかし、軍隊内の党政治事業がうまくいってないのに、党の前に無限に忠実なのか？ 不十分である。こうすれば、党のために命をかけるようになる。しかし、昌奉は四〇年間革命を行つて、成分は改造されたが、労働階級化、革命化をできなかったため、「命をかけることが」できなかった。

そのため本来の人民軍隊は、幹部を愛し、教育するが、この同務達は酒を好み、堅苦しく、無責任なのである。こんな人を母親の心情で助け、教育改造してあげるべきである。幹部達を教育して、適材適所に配置しなければならない。

軍事政治知識が必要なならば、それも学び、経済知識と党政策で徹底的に武装せねばならない。新しい幹部をよく教育し、幹部を十分に養成しなければならぬ。軍事幹部達が政治事業をもつとよくやらねばならない。政治幹部達は、軍事をもつとよく知り、戦争で指揮できるようにならねばならない。そうすれば、もしかして、地方事業もできるので

はないのか？ 特に青年幹部達を上手に教育して、我々の後方部隊にしなければならぬ。洛東江に行つて来た人達の中心ではないためか、昌奉は、私は勉強しなくても「民族」保衛相をやつてみせると言つて、勉強は必要ないと言いつつ、こうなつてしまつた。

祖国解放戦争の経験を酌み取り、我が国の実情に合わせた戦闘訓練を十分に行うべきである。決して、ソ連のものを持ち込むな。我らは防衛戦と正規化部隊、遊撃部隊の合同作戦を十分に行うことが必要である。我らは小部隊も必要であり、大部隊も必要である。軽歩兵部隊が正規軍と合同作戦を十分に行わなくてはならない。万一、我らが正規部隊を設けずに、過去のように遊撃隊部隊だけで戦えば、多くの地域を敵に奪われることもあり得る。ために、正規軍を強化し、山岳戦を取り入れねばならない。

ために、戦闘訓練や武装、装備する根拠をここに置かねばならぬ。河川と山が多い。これをどうすれば克服できるのか？ 戦争時に聞慶峠⁽²⁶⁾に軽歩兵がほんの三連隊でも配備されていれば、敵を釜山まで追い詰めたはずである。また、海岸防衛隊が今のように配備されていれば、敵は仁川に上陸できなかったはずである。

「アエプロ号」「事件」の時に軽歩兵を強化せよと言つたのに、すべて解散させた。我が国の戦略上、軽装部隊と小部隊、または正規部隊と遊撃戦を織り交せて、山岳戦を遂行するための武器によつて武装し、このような戦術によつて敵を殲滅できるようにせねばならない。正規部隊も軽装部隊として行動できるようにすべきである。無反動砲、八二ミリ迫撃砲、機関銃さえ持てば戦える。特に、夜間戦闘、山岳戦闘、迂回攻撃を実現できる部隊を組織して、訓練と戦闘準備をすべきである。我らは、大部隊戦と小部隊戦を全てできるようにすべきである。大砲も撃ち、また製造すべきであるが、それだけでは対決できない。小火器も製造し、使用できねばならない。訓練は我が国の実情に合わせねばならない。編制にこだわらず、身軽にすべきである。

敵を知るべきである。敵の準備はいかなるものか？ 敵を知る目的は、敵とどのように戦えば、勝てるかを知るため

に研究する「ことにある」。敵と戦い、勝利しようとするれば、敵を知らねばならない。そして、いかなる方法で「敵を」殲滅できるかを深く研究せねばならない。昌奉は格好だけ「つけて」、遊び回っていて、こんなことを知らなかった。軍隊内の戦闘準備が十分でも、政治事業をしなければ勝利できない。革命軍隊は軍事も重要だが、思想戦「も重要」である。思想決断である。敵は金に気を奪われているが、我々は思想的に革命のために命まで投げ出して戦うのだ。

我々は南朝鮮に奪われた土地と都市を取り戻すために戦っている。この精神で戦争準備をすべきである。政治事業を十分に行つて、敵と死戦で戦えるという精神で教育せねばならない。軍隊内の保安事業を強化せねばならない。保安事業を強化することは、部隊内に悪人が侵入できないようにすることである。昌奉は、安全部員が話しかければ軍人達は逃げるといつて、様々な口実を設け、「保安事業を」できないようにした。今、安全所をよく運営すべきである。この部員達が、保安規定を徹底的に守るようにはすべきである、保安事業は必ず必要だ。部隊内の純潔性を保障し、不純な者や反革命との闘争のために、保安事業を十分にすべきである。

最も重要なことは、戦争がどうなろうと、南朝鮮人民達が求める時には出撃すべき「こと」である。明日にでも、南朝鮮人民達が支援を求めれば、応じられるように心の準備をすべきである。戦争では、敵が先制することもあり、南朝鮮人民達がクーデタを起こすこともある。我々が出撃すれば戦わねばならず、我ら軍服を着た人々が戦う覚悟を持たねばならない。しかし、我々はいつても準備ができていない。同務達はすぐ帰つて、できなかった戦争準備をすぐに全て終わらせねばならない。戦闘準備を十分にしなければならぬ。住宅建設競争はやめよう。

兵士達の兵舎がないとか新隊員の心配ばかりするのをやめ、早く訓練させて、足りない部分何かを早めに一つ一つ理解し、解決しよう。第七師団長は情けない。足りない分を補つて準備しよう。各兵種に不足なものだけを整備し、隊列と運送車も整備せよ。今回、編制「ばかり」を数多く提起したが、砲も我らの事情に合わせて機動できるか検討し、直そう。これから兵器も数多く生産できようが、人を増やすことができない。すぐに軽歩兵旅団を小火器で武装しよ

う。無反動砲は新設計通りに製造して、人員は頭数を少なくし、整備を強化しなければならぬ。敵軍を内部崩壊させる作業を強化し、軍隊が砲だけで敵を抑えようとするのではなく、敵軍を内部崩壊させて抑えねばならない。

これは中国人が上手かった。○○○「朴正熙」傀儡の状況を見たら、米帝と○○○「朴正熙」傀儡徒党のために最後までついで行く人々と思うか？⁽²⁷⁾ 偵察事業を十分にせねばならない。

南朝鮮の地形と配置状況を洗い出さねばならない。損失を少なくし、大胆不敵に敵地の内部を調べねばならない。戦争がいつ起きるかも知れない条件の下で偵察事業を十分に行うべきである。党の唯一思想で武装しよう。党中央のように生活し、行動せよ。別の夢を見てはならない。「昌奉は」党の唯一思想を誹り、戦闘力を無力化させた。軍隊内で「金日成万歳」だけしきりに叫ぶのではなく、問題は党の路線と政策ならば命をかけて戦えるように準備しなければならぬ。「ことである」。このような情勢なので、党の唯一思想体系を確立し、特に軍隊であればあるほど強くなければならぬ。これが南朝鮮革命で勝利するか否かの鍵である。徹頭徹尾、やらねばならぬ。これから部隊に帰り、党委員会事業を強化すれば、政治的に思想を動員して、官僚主義根性がある人には認識させ、高慢な人々は自ら批判し、同務達の前で弁解せずにはっきりと批判「せよ。ただし、」過去に官僚主義の抑圧を受けた人々は、どんな時でも復讐してはならない。

官僚主義を行ったものは、この事業を通じて全て直してやるべきである。総「政治」局では計画を「下部組織に」下せ。思想闘争をするといつても、大げさに考えるな。昌奉が脱落しても、軍隊は弱くならなかった。

注

- (1) たとえば、金日成「現情勢と人民軍隊の前に出された幾つかの政治軍事家業について 朝鮮人民軍大隊長、政治部大隊長、大務社労青委員長大会で行った結論 一九六九年一月二七日」『金日成著作集』(平壤、朝鮮労働党出版社、一九八三年)二五九頁。
- (2) たとえば、『偉大な首領 金日成同志の不滅の革命業績』第九卷(平壤、朝鮮労働党出版社、一九九八年)三一九—三二二頁。
- (3) 同上、三二〇頁。
- (4) 中央情報部編「北傀軍事戦略資料集」(ソウル、中央情報部、一九七四年八月)三二七—三四一頁。
- (5) 難読な文章が多いため、当初、訳者は、演説文を持ち込んだ盧観奉氏による手書きのメモが原文ではないかと思った。しかし、二〇〇三年に訳者は、演説文を持ち込んだ盧観奉氏に電話でインタビューして、演説文が軍内学習資料に収録されていたことと、軍内学習資料にはこの会議における総政治局長の呉振宇の演説も収録されていたことを確認した。残念ながら、呉振宇の演説は要旨のみが知られており、演説文の所在はまだ明らかになっていない。
- (6) 『北韓総覧一九四五年—一九八二年』(ソウル、北韓研究所、一九八三年)一四六八—一四七〇頁。
- (7) この演説文を資料として引用した日本の研究は、たとえば、中川雅彦「朝鮮民主主義人民共和国における軍隊統制——金日成、金正日と朝鮮人民軍——」『アジア経済』四二巻一—二号(二〇〇一年一月)二一—二七頁、宮本悟「北朝鮮における政軍関係くなぜ北朝鮮の軍人はクォーターを起こさなかったのか?」『年報政治学』二〇〇五年第二号(二〇〇六年三月)一九五—二一五頁。
- (8) 金昌奉は、一九六二年一月二三日に民族保衛相に選任された(『労働新聞』一九六二年一月二四日)。民族保衛相は当時の軍人の職位では、最高位である。

- (9) 許鳳学は、一九六六年一〇月一二日に開催された朝鮮労働党中央委員第四期第一四次全員會議で、朝鮮労働党中央委員秘書局長に選ばれた(『労働新聞』一九六六年一〇月一三日)。
- (10) 崔光は、朝鮮人民軍総参謀長であった(『労働新聞』一九六八年二月四日)。しかし、一九六九年二月八日には呉振宇が総参謀長に就任しており、地位を追われたことが分かる(『労働新聞』一九六九年二月八日)。しかし、崔光は、一九八〇年代末には再び総参謀長に就任している。
- (11) 「訳注」一九五六年八月三日に開催された朝鮮労働党中央委員会全員會議における商業相・尹公欽による金日成批判に始まり、その後数年間の派閥対立で数多くの党員の亡命や肅清が発生した政変のことである。
- (12) 「訳注」集団軍は、作戦を進めるために幾つかの兵種の連合部隊によつて成り立つ軍部隊を意味する。
- (13) 「訳注」張作霖と呉佩孚は、二〇世紀初頭の中国大陸において割拠した軍閥の首領である。張作霖は東北三省、呉佩孚は直隸省(現在の河北省にほぼ該当)・山東省・河南省を勢力基盤とした。
- (14) 「訳注」北朝鮮において、同務は、革命を達成するために志を同じくする親しい間柄の人に使う呼称である。同志は、尊敬や畏敬の念が込められており、尊称として使う。
- (15) 「訳注」兵器名称のようであるが、何を意味しているのか不明である。
- (16) 「訳注」祖国解放戦争とは、北朝鮮における朝鮮戦争の呼称である。
- (17) 「訳注」労働赤衛隊とは、企業や農場、大学単位で構成される予備軍である。一九五九年一月一四日に朝鮮労働党中央委員会常務委員会で創設が宣布されたとされている「太炳烈、呉チャンボク『太陽をお連れして六〇年』平壤、金星青年出版社、一九九七年、一九七頁」
- (18) 「訳注」後に国防委員会委員になる金鉄万を意味すると思われる。金鉄万は、金正泰と共に、一九六八年九月一七日に朝鮮人民軍将領として朝鮮民主主義人民共和国英雄称号と金星メダル、国旗勲章第一号を授与したばかりである(『労働新聞』一九六八年九月一七日)。ただし、一九七〇年七月二五日にキューバに向かった軍事代表団の副団長が第一副参謀長・金鉄万上将であるので、地位を追われなかつたか、されてもすぐに復帰したものと思われる。
- (19) 「訳注」長津は、北朝鮮の東北部にある咸鏡南道にある郡の名称である。白頭山は、中朝国境にある火山の名称であり、中国では長白山(元は満州語)、現在の南北朝鮮では白頭山と呼ばれている。

(20) 「訳注」当時の外務相であった朴成哲と考えられる。朴成哲も抗日パルチザンに参加していた。

(21) 「訳注」朝鮮半島南東部を流れる韓国統治地域における最長の河川であり、朝鮮戦争において朝鮮人民軍が到達した最南端の戦線となった。

(22) 「訳注」兪昌権と金陽春は、一九六七年六月八日から一八日まで開催された朝鮮人民軍総合軍事競技大会で参加した時に、朝鮮人民軍中將であった(『労働新聞』一九六七年六月九日)。金正泰は、一九六八年八月一〇日に金日成とギニア軍事代表団の会見に同席した時に、朝鮮人民軍中將であった(『労働新聞』一九六八年八月二一日)。

(23) 「訳注」社労青とは、朝鮮社会主義労働青年同盟(現在は金日成社会主義青年同盟)の略称であり、青少年の思想教育を主な目的とした朝鮮労働党の外郭団体である。

(24) 「訳注」崔敏喆と朱道日は、一九六七年六月八日から一八日まで開催された朝鮮人民軍総合軍事競技大会で参加した時に、朝鮮人民軍中將であった(『労働新聞』一九六七年六月九日)。

(25) 「訳注」平壤特別市寺洞区域にある地名である。

(26) 「訳注」慶尚北道の西北部にある聞慶鳥嶺を意味する。朝鮮戦争で南進していた朝鮮人民軍の進撃がここで止まったとされる。韓国では聞慶峠とはあまり言わないが、北朝鮮では趙基天による作詞、李冕相による作曲の「聞慶峠」という歌謡曲があり、有名である。

(27) 「訳注」〇〇〇は、韓国中央情報部で削除されたものであろう。「北傀軍事戦略資料集」に収録された他の北朝鮮の文献でも、朴正熙は〇〇〇によって必ず削除されている。